

## 2020年の刻印

阿部 賢一

今から一年ほど前の2020年初頭、新型コロナウイルスが各地で広がりを見せるとともに、現代文芸論の日常生活も変化を遂げていった。大勢の人が集まる行事は軒並み中止となり、同年3月末で退職を迎える沼野充義先生の最終講義・パーティも中止となった。その後、関係者の尽力もあって、2020年3月28日、最終講義「チェーホフとサハリンの美しいニヴフ人——村上春樹、大江健三郎からサンギまで」をYouTubeで配信することができた。少なくとも東大文学部の教員に限ってみれば、YouTubeでの最終講義はおそらくこれが最初だろう。そればかりか、卒業式、学位記授与式も規模を縮小し、教室を借りて、学位を手渡すだけの簡素な会となった。そして何よりも、2020年春以降、対面での授業は原則とりやめ、全面的にオンラインへ移行した。授業開始が一か月ほどずれ込んだものの、それまで一部の人しか使っていなかったZoomは授業に必須のソフトとなった。

この間、オンライン授業をめぐる様々な意見が飛び交った。「履修者の表情が見えないので雰囲気がかみにくい」——「パジャマのまま、授業が聞けるので、助かっている」、「資料が事前配布され、授業に臨みやすくなった」——「資料やパワーポイントを事前に作成する必要がある、アドリブがきかない」、「質問もチャットででき、友人の前でするより心理的に楽だった」——「知り合いができず、淋しい感じがする」など。

オンライン授業の効果については、これから精査すべきだが、文学研究という観点から見れば、理学や工学といった実習・実験を伴う研究に比べれば、総体的に環境は整っていたと言えるだろう。もちろん、移動の制限により、図書館や資料館の利用ができなくなったことは事実である。その一方で、テキストとPC（そしてwifiとデータベース）さえあれば、孤絶した環境でもある程度の研究ができるのが文学研究である。図書館や自室だけではなく、カフェでも、公園でも、孤島でも環境さえ整えば、本を読むことも、文章を書くことはできる（碩学エーリッヒ・アウエルバッハが故国ドイツからイスタンブールへ逃れ、現地で『ミメシス』（1946）を書きあげたことはよく知られている）。そういう意味では、柔軟性に富む営みなのかもしれない。

だが、日々、更新される様々な数値や表を見て、気持ちが下向きになりかけたということは一度ならずあっただろう。とはいえ、そういうなかでも、こういった文章が集まり、

昨年同様に刊行にこぎつけたことは本当に貴重である。今号に収録された論文、研究ノート、書評は改めて言うまでもないが、「2020年」に執筆され、推敲され、編集されてかたちになったものである。おそらく個々の文章を読んだだけではわからないだろうが、どの行間にも「2020年」が刻印されている。

そう、日常は続く。いつの日か、「2020年は大変だね」と過去形で話せる日が来るのをただ心待ちにしている。